

## 自記年譜

### 服部 裕

一九五二年（昭和二十七年）誕生

十月十八日、群馬県前橋市天川町（現文京町）に服部文男とサクの末子長男として生まれる。父文男は群馬県新田郡綿打村（現太田市新田町）の自作農の分家、つまり貧家の生まれで、幼少期に父親を亡くしたこともあり憧れの中学校進学はかなわなかった。高等小学校を卒業したあと昭和八年十六歳で上京し、広尾の通信講習所に入學する。この頃から文学とテニスを始める。卒業後、群馬県原町や茨城県阿見町の特定郵便局、さらに東京中央電信局の勤務と中国での兵役を経て通信官吏練習所に進み、昭和十七年に無線通信科を卒業する。戦後は一貫して電信電話公社に勤務する傍ら、少年期からの文学への夢を断ち切れず様々な同人誌に小説を発表する。（これらのことは私家版『ふるさと考／行人譜』と『煙火饗宴』に詳しい。）職業作家の夢はかなわなかったが、終生、創作を捨てることはなかった。群馬県水上町の小さな電話局の局長を最後に退職し、晩年は群馬ペンクラブの副会長として文学に携わるとも

に、生涯の趣味であるテニスを日課とした。以上の通り、私の出自は典型的な下層中産階級にある。戦後に生まれたのが幸いであった。

一九六八年（昭和四三年）高校入學

中学校卒業間近の一月末、父親の東京転勤のため前橋市立第五中学校から練馬区立石神井南中学校に転校する。右も左も分からないなか、都立石神井高等学校に入學する。学校群制度の第二期生としての入學だった。同じ第三学区三十四群の人気校である大泉高校に進めなかったのは、他の受験生と同様に少し残念だったと記憶している。とはいえ、自由な校風の石神井高校の生活は概ね楽しかった。学生運動が激しかった頃で、同校にも運動する先輩がおり、行動を共にするように声をかけられたが、鄭重にお断りしたことを覚えていいる。ラディカルなようで、すでに安全策を選択するつまらない人間だったが、それが幸いした。ちなみに同じ学年の一人は運動に飛び込み、どこかで逮捕された。

高校時代の最も衝撃的な出来事は、七〇年十一月に三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷駐屯地（現防衛省）で割腹自決したことである。天気の良い昼頃、放送部の校内放送で訃報が流れると、私も含めてみな驚きを隠せず大いにざわついたことを鮮明に記憶している。大江健三郎、カフカあるいはカミュなどとともに三島も耽読していたので、その衝撃は小さくなかった。

一九七一年（昭和四六年）上智大学入學

三月、都立石神井高等学校を卒業する。

四月、上智大学文学部ドイツ文学科に入學する。独文か仏文か迷ったが、自分にあうのはドイツ語であろうという根拠ない思いからの入學だった。しかし、その勝手な思い込みが結構当たっていたことが後に判明

する。ドイツ語の具体性と論理性が性に合っていたからだ。ドイツ語を学ぶことは実に楽しかったが、会話はもとより読解力は少しも向上しなかった。それがためか、読み・書きのみならず聞き・話す力も身につけたいという思いが募り、ドイツ留学を夢みるようになる。

卒業論文は、ドイツ演劇の碩学尾崎賢治先生に師事し、ブレヒトの『ガリレイの生涯』について書く。尾崎先生とは八一年に（後述の）留学地フライブルクで久しぶりに邂逅した。先生の帰国便がパリ発だったためパリまで一緒に、妻カトリヌ（七九年に結婚）の実家にお泊まりいただいたことが懐かしい。留学から帰国後、私が職を求めて色々な大学に応募する際、ただ一人推薦状を書いてくださった尾崎先生は、八四年夏に若くして急逝された。実に悲しかった。奇しくも私の秋田大学着任の前年だった。

上智大学時代、ドイツ文学以外では特にドストエフスキーを根を詰めて読んだ。

一九七五年（昭和五〇年）上智大学卒業、ドイツ・フライブルク大学入学  
三月、上智大学を卒業する。

一社からも内定が取れなかったことを折からの就職難にかこつけ、父親にドイツ留学を許してもらおう。三月末に渡独し、シュタウヘンとリュート・ルードヴィヒ大学・フライブルクのドイツ語試験をやる。アルベルト・ルードヴィヒ大学・フライブルクのドイツ語試験に合格し、十月、同大学のドイツ文学科と日本学科に学籍登録する（文学部や理学部は二つの主専攻、または一つの主専攻と二つの副専攻が課せられる）。幸いなことに、ドイツの大学は学生（留学生を含む）の学費負担がないため、留学が可能になったとも言える。ドイツ政府には終生、感謝あるのみで

ある。

一九七八年（昭和五三年）フライブルク大学ドイツ文学科中間試験

ドイツの大学は学士課程と修士課程との区別がないので（現在は一九九九年のポローニャ・プロセスに応じて学士課程が存在するようだが）、学部卒である私も、学部の第一セメスターから始めなければならなかった。また、ドイツの大学は卒業制度がなく、学位試験なしは国家試験に合格し資格を取得して修了となるため、マギスター・アルティウム（M・A）を目指すことにする。ちなみに、最終試験に二度落ちて資格が取得できないと、それまでの学業はすべて無に帰する。あくまでも最終試験に合格しなければならず、単位取得で卒業できる制度ではない。

課程後半のメイン・ゼミに進むには、四セメスター以降に Zwischenprüfung と称する中間試験に合格しなければならないが、なんとか合格し進級した。中間試験も含む学位試験などの大きな試験は伝統的に口頭試験で、ノートや筆記具の類は一切持つことが許されず、口一つで受験しなければならぬので、結構厳しいものだった。（十九世紀の小説によく出てくる口頭試験がこれである。）なお、日本学科の中間試験は、上智大学の単位取得状況が考慮されて免除された。この間、大学での講義やゼミ以外に、日々欠かさず新聞を読んだり、毎日のように学生寮の友人と熱いディスカッション（主に社会・政治ネタ）やビール・パーティーなどに励んだおかげで、語学力を伸ばせた。このように友人たちとの交流でドイツ語を身につけたのは確かだが、会話だけで総合的な語学力を伸ばすことは能わない。読解力はもとより会話力も、きちんとした文章をたくさん読まなければ決して身につかないことを実感した。

一九八〇年（昭和五五年）M・A論文執筆、ドイツ文学科学位試験

ドイツ文学科と日本学科で所定のゼミの単位(Schein)を取得したあと、ドイツ文学科でマギスター論文(“Zwischen Idealismus und Gesellschaftskritik. Eine Studie zur Themenentwicklung der frühen Werke Heinrich Bölls von 1947 bis 1963.” A 4 168頁)を書いた。二つの主専攻の場合、マギスター論文はいずれかの専攻科で書けばよい。

修士論文の審査に合格したあと、学位口頭試験のテーマを「ドイツ悲劇」に決める。試験はバロック文学から現代文学までの作品についての質問に答える形式で行われる。試験の対象となる作品は時代毎に五〜六篇を自ら選定し、事前に指導教授に提出しておく。その文献リストに従い一学期かけて試験の準備をした上で、指導教授による一時間の口頭試験を受験する。公正を期するために、口頭試験には議事録作成の教授が陪席する。一学期の準備のあと、冬学期の最後にいよいよ試験に臨んだ。冒頭のバロックで少々躓いたが、あとは無難にこなし、なんとか合格できた。

ドイツ文学科の口頭試験に合格したあと、もう一つの主専攻である日本学科の口頭試験のテーマを「中世文学」に決める。上代文学や中古文学には到底歯が立たないと思ったからである。テーマを指導教授に申告してから、一学期間の準備に入る。指導教授は上代文学が専門のナウマン先生(女性)である。ナウマン先生には、文献購読の授業で他の受講生と同様に、細かい文法の追及を受けてこてんぱんに打ちのめされていた。日本からの留学生には特に厳しかった。それでも二回目当たったときからは、他の学生に比べ多少やさしめの指導になったのが嬉しかった。ナウマン先生の下で学んだことが、後に明星大学の授業に少しは役立つようになることなど、当然のことながら思いもよらなかった。

一九八一年（昭和五六年）日本学科学位試験

夏学期の終わりに日本学科の学位口頭試験に合格する。試験はその場で渡されたテキストについて行われた。試験の冒頭、テキストのタイトルを問われ、音読したあと表現形式や内容についての質問が続いた。テキストは幸い準備万端の『平家物語』だったため、すべての質問に無難に答えることができた。仮にタイトルが答えられなかったとしたら、その時点で不合格が決定しただろうが、あまりにも有名な冒頭のくだりのため、それが『平家物語』であることは私でも難なく答えられた。幸運だった。

以上でフライブルク大学の全課程を修了し、マギスターの学位を取得した。学位記には論文及び二つの学位試験の平均点が記載されているが、評価2を得られたことは素直に嬉しかった。(ドイツの評価は1が最高で、4が最低合格点である。)

九月、帰国する。実務翻訳や通訳で糊口を凌ぐが、生活は安定しなかった。

一九八二年（昭和五七年）民間会社勤務

七月、ドイツ系の製薬会社(ヘキストジャパン)に職を得て、主に医療系のドイツ語文献の翻訳を行う。

一九八三年（昭和五八年）群馬大学非常勤講師

四月、ヘキストジャパンに勤務する傍ら週休二日の土曜日を利用して、群馬大学教養部の非常勤講師(ドイツ語)の職を得る。(至一九八五年三月)

一九八五年（昭和六〇年）秋田大学教育学部着任

三月、ヘキストジャパンを退職するとともに、群馬大学非常勤講師を退任する。

四月、秋田大学教育学部助手（一般教育ドイツ語）に着任する。

同月、日本独文学会、オーストリア文学研究会、並びに東北独文学会に入会する。（至現在）

一九八六年（昭和六一年）教育学部専任講師（以下、教育・研究業績併記）

二月、論文「Zu Peter Handkes subjektivistischer Literatur. Mit einer Interpretation über "Die Stunde der wahren Empfindung"」秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学（36）、47—58頁。  
十月、秋田大学教育学部専任講師に昇任する。

一九八七年（昭和六二年）

二月、論文「ペーター・ハントケの劇作、話劇と『カスパー』にみる詩的フォルムへの可能性」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学（37）、67—75頁。

一九八八年（昭和六三年）

第28回ドイツ語学文学振興会奨励賞を受賞する。対象論文は「ペーター・ハントケの劇作、話劇と『カスパー』にみる詩的フォルムへの可能性」。

一九九〇年（平成二年）教育学部助教授

二月、論文「カフカの「判決」、物語の構造とその解体」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学（41）、103—110頁。

十月、秋田大学教育学部助教授に昇任する。

一九九三年（平成五年）

一月、論文「ペーター・ハントケの『ゴールキーパーの不安』にみる対象・言葉・主体の関係」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学（44）、29—37頁。

一九九五年（平成七年）

五月、論文「特集 外国事情」、ドイツその分裂と統一」、秋田大学総合基礎教育研究紀要（2）、15—25頁。

一九九六年（平成八年）

三月、論文「多様性のなかのヨーロッパ近代、比較文化論の試み」、秋田大学総合基礎教育研究紀要（3）、64—74頁。  
十二月、論文「ペーター・ハントケの『長い別れへの短い手紙』、新しい主体を求めて」、オーストリア文学（12）、18—27頁。

一九九七年（平成九年）

三月、論文「近代ヨーロッパの本質と近代日本、個人主義の問題をめぐって」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学（51）、45—53頁。

五月、論文「ドイツ表現主義映画の伝統と現代ドイツ映画、ヴェンダースとヘルツォークの映画がみせる近代精神への批判」、秋田大学教育

文化学部研究紀要・人文科学・社会科学(52)、81—87頁。

同月、論文「プレゼンテーションとディベートの方法に関する諸問題、日本におけるコミュニケーションのありかたとその文化的背景」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学(52)、89—93頁。

同月、論文「映像文化に関する一考察、大衆時代の芸術としての映画」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学(52)、75—80頁。

一九九八年(平成十年) 改組に伴い教育文化学部助教授

三月、論文「近代なき『近代の超克』、『世界的立場と日本』の意味」、秋田大学教育学部研究紀要・人文科学・社会科学(53)、43—54頁。  
四月、改組に伴い秋田大学教育文化学部助教授に改称する。

一九九九年(平成十一年)

三月、論文『モダン・タイムス』と『メトロポリス』に関する比較文化論的考察、文明批判映画に現れる個人主義的社会と権威主義的社会」、秋田大学教育文化学部研究紀要・人文科学・社会科学(54)、37—43頁。

四月、日本独文学会東北地区選出理事。(至二〇〇〇年三月)

二〇〇〇年(平成十二年) 在外研究(ミュンヘン大学)

三月、論文「映画に現れたコミュニケーションの諸相…映像文化コミュニケーション・社会科学論の試み」、秋田大学教育文化学部研究紀要・人文科学・社会科学(55)、29—39頁。

五月、文部省在外研究員として渡独し、ミュンヘン大学で研究を始める。この間、バイエルン国立歌劇場でモーツァルトなどのオペラを多数

鑑賞する。

二〇〇一年(平成十三年) 在外研究から帰国

三月、在外研究から帰国する。在外研究最終日、研究対象である作家ペーター・ハントケに送っていた手紙に対して本人直筆の短い返信が届く。自分の手紙を読んでもらったことに感謝の気持ちを覚える。

十二月、論文「文学的理想としてのユーゴスラヴィア、ペーター・ハントケの“Eine Winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien”と“Abschied des Träumers vom Neuhren Land”についての考察」、東北ドイツ文学研究(45)、59—78頁。

二〇〇三年(平成十五年)

三月、論文「ディベートによる学生参加型授業の試み、『総合学習』におけるディベートの可能性」、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要(25)、133—143頁。

同月、論文「舞台の上のカスパー、戯曲『カスパー』の上演にみるペーター・ハントケの言語批判の現在」、秋田大学教育文化学部研究紀要・人文科学・社会科学(58)、1—7頁。

二〇〇四年(平成十六年) 明星大学日本文化学部言語文化学科着任

一月、科研究費による調査旅行…「ペーター・ハントケの文学における自然描写が持つ近代批判的な意味に関する研究」のために、フランスのエクサン・プロヴァンスを訪れ、ポール・セザンヌのアトリエやサン・ヴィクトワール山などにおいて実地調査を行う。

三月、論文「ペーター・ハントケの作品における「言語表現」と「言語喪失」との関係についての考察」、「Wunschloses Unglück」の言語表現を手掛りにして」、秋田大学教育文化学部研究紀要・人文科学・社会学(59)、1―8頁。

同月、秋田大学教育文化学部を退職する。

四月、明星大学日本文化学部言語文化学科教授に着任する。

七月、科研費による調査旅行「ペーター・ハントケの文学における自然描写が持つ近代批判的な意味に関する研究」のために、グリフェン(オーストリア)のペーター・ハントケの生家、並びにハントケの作品が描写しているスロベニアの諸地域(イェニッツェ、ポヒスカ・ピストリツェ他)を訪れ実地調査を行う。ハントケの作品に現れた自然観や人間観の原点を目的に据えにする。

二〇〇五年(平成十七年)

六月、言語文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事「映画の誕生」。

七月、言語文化学科「比較文化研究2」実地研修・受講生を引率してヨーロッパ実地研修を行う。ミュンヘン大学、ダッハウ強制収容所跡地、ノイシュヴァンシュタイン城、パリ・ルーブル美術館、ヴェルサイユ宮殿等々を視察するとともに、バイエルン国立歌劇場でオペラ『ロメオとジュリエット』(Ch.グノー)を鑑賞する。

十一月、明星大学青梅校主催公開講座「西ヨーロッパの家族形態…家族のあり方みる西欧文化の多様性」。

二〇〇六年(平成十八年) 科研費研究報告書提出

三月、科研費報告書「ペーター・ハントケの文学における自然描写が持つ近代批判的な意味に関する研究」、基盤研究(C)(2)研究成果報告書、80頁。

同月、論文「ペーター・ハントケの文学的想像力、『サント・ヴィクトワールの教え』が意味するもの」、明星大学研究紀要・日本文化学部言語文化学科(14)、91―109頁。

七月、言語文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事「芸術と『政治』」。

二〇〇七年(平成十九年)

三月、論文「ことばと自然の物語への旅立ち、ペーター・ハントケの『反復』についての考察」、明星大学研究紀要・日本文化学部言語文化学科(15)、17―36頁。

四月、言語文化学科主任に就任する。(至二〇〇九年三月)

六月、日本文化学部言語文化学科の改組改編の準備を開始する。

九月、言語文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事「文化の反映としてのことば」。

十月、明星大学青梅校主催公開講座「『ドイツ文化の過去と現在』…戦後ドイツと日本、過去との対決と忘却」。

二〇〇八年(平成二十年)

三月、論文「健脚が生む物語…ペーター・ハントケの風景を追う旅の報告」、明星大学研究紀要・日本文化学部言語文化学科(16)、41―54頁。

四月、日本文化学部言語文化学科の人文科学部日本文化学科への改組の準備を進める。

二〇〇九年（平成二十二年）日本文化学部部長就任

一月、言語文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「映画研究会09年度の活動に寄せて」。

三月、論文「文学の自律性とその限界、ペーター・ハントケの『Die Tablas von Daimiel』を手掛かりにして」、明星大学研究紀要・日本文化学部言語文化学科(17)、61―74頁。

同月、言語文化学科主任を退任する。

四月、日本文化学部部長に就任する。(至二〇一〇年三月)

六月、日本文化学部言語文化学科日野校移転の準備を開始する。最大の課題は学生及び保護者の承諾を得ること。

十月、言語文化学科映画研究会…蒼星祭で上映会を開催して『父親たちの星条旗』と『硫黄島からの手紙』（クリント・イーストウッド監督、二〇〇六年）を鑑賞し、戦争映画における「ヒーロー像の否定」について討論する。

十二月、言語文化学科FD研修会発表「ディベート授業の実践報告」。

二〇一〇年（平成二十二年）人文学部部長就任

二月、言語文化学科日野校移転に関して、学生及び保護者の承諾が概ね得られる。

三月、論文「ペーター・ハントケの『真の感覚の時間』における主観主義的な語りが意味するもの」（一九八六年の論文Zu Peter Handkes subjektivistischer Literatur. Mit einer Interpretation über "Die Stunde der wahren Empfindung"を邦訳し、内容を加筆改訂した論文）、明星大学研究紀要・日本文化学部言語文化学科(18)、19―30頁。

同月、日本文化学部部長を退任する。

四月、日本文化学部言語文化学科が人文学部日本文化学科に改組される。

同月、人文学部部長に就任する。(至二〇一二年三月)

十月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して『パワ―オブ・ワン』（ジョン・G・アヴィドルセン監督、一九九二年）と『インヴェイクタス』（クリント・イーストウッド監督、二〇〇九年）を鑑賞し、「差別とその克服」について討論する。

二〇一一年（平成二十三年）

一月、日本文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「クリント・イーストウッドの偉業」。

三月、論文「個人主義の意味、近代民主主義の価値観の理解のために」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科(19)、15―32頁。

十月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して『東京原発』（山川元監督、二〇〇二年）を鑑賞し、原発政策とそれに関する社会状況について討論する。

二〇一二年（平成二十四年）明星大学副学長就任

三月、論文「ペーター・ハントケは何処に向かって帰郷するのか？ハントケ文学の転換点としての『ゆるやかな帰郷』に関する考察」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科(20)、15―27頁。

同月、人文学部部長を退任する。

四月、明星大学副学長（教学担当）に就任する。(至二〇二〇三月)  
五月、日本文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…

「民主主義とポピュリズム」。

十月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して『ミリオンダラー・ベイビー』（クリント・イーストウッド監督、二〇〇四年）を鑑賞し、人間の孤独と愛について討論する。

#### 二〇二三年（平成二五年）

三月、論文「個人主義の意味（2）、日本の民主主義と個人主義」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（21）、19―37頁。

五月、学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「小説『レ・ミゼラブル』、偉大なる近代人の物語」。

十月、日本文化学科主催公開講座「『レ・ミゼラブル』とその時代」…『レ・ミゼラブル』と近代精神、近代人が背負った使命」。

十月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して『レ・ミゼラブル』（トム・フーパー監督、二〇一二年）を鑑賞し、原作と比較しながら近代人の倫理観に表れた近代精神について討論する。

#### 二〇一四年（平成二六年）

三月、論文「個人主義の意味（3）、民主主義を支える自立した個人」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（22）、15―33頁。

五月、学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「民族と人間、映画『ハンナ・アレント』鑑賞雑感」。

十月、日本文化学科主催公開講座「戦争とメディア」…「昭和の戦争と第二次世界大戦、日本とドイツ」。

十一月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して『小さいおうち』（山田洋次監督、二〇一四年）を鑑賞し、戦争をもたらす日

常生活のあり様について討論した。

#### 二〇一五年（平成二七年）

五月、日本文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「近代帝国主義の歴史と今日」。

十一月、日本文化学科映画研究会…星友祭で上映会を開催して本年度アカデミー作品賞を獲得した『バードマン』（アレハンドロ・G・イニャリトゥ監督、二〇一五年）を鑑賞し、このようにおもしろくない作品がアカデミー賞を取ったことの意味について討論する。

#### 二〇一六年（平成二八年）

三月、論文「小説『レ・ミゼラブル』と近代精神、啓蒙の書としての『大衆小説』」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（24）、17―36頁。

四月、日本文化学科ホームページ「ことばと文化のミニ講座」記事…「日本の三権分立を問う」。

九月、日本文化学科「比較文化研究」実地研修…受講生を引率して沖縄県那覇市を訪れ実地研修を行う。一日目はひめゆり館や摩文仁の丘などを訪れ、沖縄戦の実態を視察する。二日目は普天間基地を視察し、沖縄国際大学の佐藤学教授のレクチャーを受けてその歴史と実態を学ぶ。さらに、辺野古基地建設予定地を訪れ、現地で反対運動を行っている人々の話を聞く。三日目は首里城を見学し、琉球文化を視察する。

十月、日本文化学科主催公開講座「国家と宗教」…「キリスト教国家から近代民族国家へ」。

二〇一七年（平成二九年）

三月、論文「ペーター・ハントケの『行商人』、新たな文学的叙述の模索」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（25）、17―25頁。

十一月、日本文化学科映画研究会・星友祭で上映会を開催して二〇一六年にアカデミー監督賞などを獲得した『ラ・ラ・ランド』（デミアン・チャゼル監督、二〇一六年）を鑑賞し、その表現法や過去の作品へのオマージュなどについて討論する。

二〇一八年（平成三〇年）

十月、私立大学協会教務研究委員会委員として、第五十六回大学教務部課長相当者研修会（浜松市）の運営に携わる。

同月、日本文化学科主催公開講座「平成の30年／平成時代の世相と文化」：「民主主義とポピュリズム、ポスト冷戦時代の民主主義」。

二〇一九年（平成三一年／令和元年）

三月、論文「帝国主義論考、ホブスンの『帝国主義論』に関する一考察」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（27）、35―50頁。

九月、私立大学協会教務研究委員会委員として、第五十七回大学教務部課長相当者研修会（神戸市）の運営に携わる。

二〇二〇年（令和二年）

三月、論文「ハンナ・アレントの帝国主義論、国民国家崩壊の『物語』」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（28）、41―55頁。

三月、明星大学副学長を退任する。

二〇二一年（令和三年）

三月、論文「幸徳秋水の『廿世紀之怪物帝国主義』に関する一考察、近代文明の理念による帝国主義批判」、明星大学研究紀要人文学部・日本文化学科（29）、29―43頁。

二〇二二年（令和四年）

三月、論文「近代思想と民主主義」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（30）、19―33頁。

同月、随筆「民主主義の現在」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（30）、3―5頁。

二〇二三年（令和五年）

三月、論文「創作の軌跡を跡づける文学的自伝の物語、ペーター・ハントケの『別の国のわたしの日』』についての一解釈の可能性」、明星大学研究紀要・人文学部日本文化学科（31）。

同月末日、明星大学人文学部日本文化学科を退職する。十九年間、小職を支えてくださった明星大学の教職員、とりわけ日本文化学科（旧言語文化学科）の諸先生には心からの謝意を表す。